【湘南医療大学　ティーチング・ポートフォリオ】

大学名　湘南医療大学
所　属　看護学科
名　前　岡　多恵
作成日　2026 年 5 月 11 日

1. 教育の責任

本学は、「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」を理念に掲げる医療大学であり、私は、看護学科、臨床看護領域(がん看護)に所属し、職位は講師である。本学に勤務して 9 年目となるが、現在まで主に「成人看護方法論Ⅰ(必修・2 年)」「成人看護方法論Ⅱ(必修・3 年)」「ナーシングプロセスⅡ(必修・3 年)」「看護倫理(必修・3 年)「慢性期看護実習(必修・3 年)」「統合実習(必修・4 年)」を担当している。

教育活動としては、2 年次生のチューターであり、学部委員会である「地域連携推進室会議委員会」に所属し、学科内委員会では、「実習委員会」「PDC 担当」に所属している。学生が、主体的かつ自律した行動がとれるように、専門職を目指すものとして学修・生活習慣が修得できるよう、学生の個々の様子に注意しながら指導を行っている。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私は、がん看護専門看護師として患者や家族、そしてスタッフと関わっていた。その中で、「看護はとても面白い」「患者・家族と関わること、看護の専門性」について、伝えたい、という願いがあった。国家試験に合格するための学修だけではない、「人と関わる」ことを学んでいこうとしている学生に、少しでもリアリティのある現場の状況を伝え、自ら考えてもらい、教育の現場と、臨床の現場がより繋がって、学生を育て、新人を育て、経験者を育てていけるようになれば、看護の質の向上に繋がっていくと考える。看護の専門性を、より社会に訴えていくためにも、初学者の教育はとても重要であり、この教育を現場に繋いでいくことが、さらに大切なことであると考える。学生は、国家試験合格、という目標があるが、知識だけ詰め込んで終わる学生生活だけではなく、講義や日常生活、または大学行事や友人と過ごす時間も含め、社会全体を大きくみる、視野が広がるような体験や学修をしてもらいたい。この経験が、職業人になってからも、将来の自身のキャリアを考えるきっかけになると考える。

2) 理念をもつに至った背景

がん看護専門看護師として、私のサブスペシャリティは「緩和ケア」である。がん患者や家族の苦悩に寄り添い、ケアを行っていたが、その患者家族と関わる、現場のスタッフの苦悩にも寄り添っていた。変化していくスタッフを目の当たりにし、専門看護師としての活動の意味を実感できていた。そして、この経験を初学者に伝えできないか？と考えたことが、大学教育に入ったきっかけでもあった。また、教育現場と臨床現場の繋がりについて、もっと強化できないか？と疑問ももっていたことも、きっかけの一つである。当初は、臨床の現場とあまりにも違いすぎる大学教育現場に、戸惑いや不安を覚え、がん看護専門看護師として活動するのは、初学者の場所ではなく、臨床の場ではないのか？と考え、上司に相談したことがある。その時に「がん看護専

門看護師が活動する場は臨床だけではない。そうなりたい、と思う学生を育てること、臨床家になっていく学生を育てることも、重要な役割の一つである。見方を変えてみる」と助言を頂いた。この言葉がとても心に残り、そして現在の私の土台を作って頂いたと考えている。私は、見方を変えて、がん看護専門看護師として、初学者の教育に携わり、看護の専門性について、共に考えていき、そして臨床との繋がりをますます強化していきたいと考えている。

3. 教育の方法・戦略

【成人看護方法論Ⅱ】

授業概要:慢性期・急性期に経過する健康障害を持つ人のセルフケアを促進し、その人らしい生活を維持するための支援の方法について学修する。さらに、人生の最期のときにある人とその家族に対するケア、遺族へのグルーフケアについて学修する。

教授方法:15 回の講義をオムニバス形式で担当教員が行う。その中で、がん看護専門看護師としての専門性を生かし、「人生の最期のときにある人および緩和ケアを必要とする患者と家族への看護　生命を脅かす疾患」について担当する。講義形式で、学生の反応を確認し、適宜グループディスカッションを交えて行う。

授業の工夫:がん看護専門看護師として、サブスペシャリティを活かし、知識の提供だけではなく、教員の体験等からの具体例をあげ、学生がイメージをさらに持ちやすくするような工夫を行う。

授業以外の諸活動:がん看護専門看護師として、高齢がん患者の意思決定支援に関する研修企画・運営に携わっている。

自己研鑽:高齢がん患者の意思決定支援の研修会において、ファシリテーターを行うことによって、多職種連携について学修を行っている。

【慢性期看護実習(一般病棟の入院治療が必要な対象の慢性期看護実習)】

授業概要:慢性期、回復期、終末期の患者を受け持ち、看護の実践を学ぶ。身体的側面、心理社会的側面からアセスメントし、看護計画立案と実践を行う。患者および家族との信頼関係を築き、根拠に基づく看護実践およびその評価を行う。実習を通して自らの看護観をより深めるような学びとすることである。

教授方法:3週間の実習期間を、学内演習では、オリエンテーションを行い、実習に必要な演習を行い、看護過程の思考過程の整理、まとめを行う。臨地実習では、1名以上の患者を担当し、患者が抱える問題について看護過程を展開し看護実践を行う。

授業の工夫:学生個々の個性を大切に、その学生に合ったペースで、看護実践が行われるよう、学生個人の目標が持てるように、面談等の関わりを持ちながら、学生とともに行っていくことを工夫している。学生とのコミュニケーションを大切にし、必要時に面談を行う。また、学生の記録の振り返り等は、学生の実習終了後のタイミングで、行っている。

4. 学習成果

【成人看護方法論Ⅱ】

評価:学生のリアクションペーパーから、終末期に関しての興味や学修を継続したい、という感想や、身内の方を含め、「死」を経験されていない学生が多く、「想像できない」「死の話をされても、答える自信がない」「怖い」という感想がある。様々な感想があるが、実習前の学修(3 年前期)として、自分事として学修を行っている。

成果:がん看護に興味をもち、将来、がん看護専門看護師をめざしたい、と話をする学生や、看護師になって患者と関わる際に、ここで学んだことを忘れずに、看護を行っていきたい、と話してくれる学生からのフィードバックから、成果ととらえた。

【慢性期看護実習(一般病棟の入院治療が必要な対象の慢性期看護実習)】

評価:実習後の面談で、実習に対して学生から学修面、精神面の振り返りの言葉として「基礎知識がなく、勉強の必要性がわかった」「患者と関係性をとることの難しさがわかった」「辛いときもあったが、声かけをしてもらって実習中の気持ちがとても楽になった」など、実習に対しての自分自身や教員に対しての言葉が聞かれた。

成果:教員・指導者ともに的確な指導を丁寧であったため、安心して実習が行えた、ケアの演習をもっと増やした方がよいなど、良い面・もっと改善が可能な点が得られたことが成果であるととらえた。

5. 改善のための努力

・実習中の記録物に関して:なんのために記録を行うのか、を学生に教授を行っていくが、実習中、何を大切に、何を学ぶ必要があるのかを、慢性期看護の先生方と話し合いを行いながら、記録物の見返し、整理、修正を行っていく。

・レポート課題について:自身が実習で行ってきた看護をリフレクションすることは、時には、自分自身に向きあうことになり、厳しくなることもある。その際には、面談等を行うことも考慮し、個々の学生対応を行っていくことを考える。

6. 今後の目標

【長期目標】:病態を理解したうえで、「看護」とは何をすることか、について考え、そのためには何が必要かを学生自身が考えられるように、学生が自ら参加して学べるように講義等を組みたてられるようにする。

【短期目標】:・担当する講義を学生が、積極的に参加できる工夫(アクティブラーニング等)を行う (12 月末まで) ・学生が「看護観」について考えられるように、提出されたリフレクションペーパー等のフィードバックを行う(12 月末まで)